

気候変動への適応など忘れよう 経済開発による気候への適応こそ重要だ

杉山 大志 (すぎやま たいし) 一般財団法人キャノングローバル戦略研究所 研究主幹

本稿はパトリック・ブラウン

Forget Adapting to Climate Change: We Must First Adapt to the Climate We Have

<https://thebreakthrough.org/journal/no-20-spring-2024/forget-adapting-to-climate-change>

をブレイクスルー研究所の許可を得て邦訳したものである。

気候変動への適応は、国際的にも国内においても注目され続けている。このような議論においては、以下のようことが言われ続けている。「人類は多かれ少なかれ過去の気候に十分適応してきた、だが現在では、気候変動の急速かつ前例のない速さが、気象・気候災害に対する社会の強靭性を高めるための投資の主な動機となっている。また、気候変動への適応はうまくいっていない。なぜなら気候は、私たちが適応するよりもはるかに速いスピードで変化しているからだ。」

だが実際のところ、人類はこれまで、様々な気候に対して十分に適応してきたとは言い難い。私たちの歴史的な気候は、穏やかさや優しさからは程遠く、私たちの幸福には無頓着であり、しばしば敵対的でした。だからこそ歴史を紐解けば、気候が社会に壊滅的な影響を与えた事例が数多く存在するのだ。

同時に人類は、気候変化による悪影響が顕在化するよりも以前に、気候が本来持っている敵意に対する防御力を強化することに大成功を収めてきた。このような気候への適応（いわゆる気候変動への適応とは異なる）は、国連の報告書や地方自治体の取り組みに関連した新しい現象と言うわけではない。むしろ、経済発展や技術進歩に後押しされ、環境に対する人類の脆弱性を減らそうとする、絶え間ない原動力が継続しているだけのことだ。

気候への適応には実績がある

これまでの経験則によれば、人類が長期的に気候への適応力を高めていることは、非常に好ましい事実であり、社会において気候的影響を受けやすい側面のほぼすべてが、概して良い方向に傾いている。農作物の収穫量が増え、一人当たりで利用できるカロリーが増え、栄養失調や飢饉による死亡率が減少していることが分かっている。安全な飲料水の利用は増加し、マラリアのような気候に影響されやすい疾病の流行は減少した。さらに、寒さと暑さの両方の極端な気温による死亡率が低下し、自然災害による死亡率も低下した。

経済指標もこの状況を裏付けている。一人当たり GDP や極度の貧困状態にある人の割合のような一般的な経済指標は、気温が上昇する中であって大きく改善しており、GDP あたりの災害による経済的被害は横ばいまたは減少している。